

『稿本天理教教祖伝』108頁の終わりに、「明治五年六月十八日には、梶本惣治郎妻おはるが、四十二歳で出直した。」とあります。

教祖の3女で、梶本家へ嫁がれたおはる様は、教祖が、「何でも彼でも、内からためしして見せるで」と仰せられて、嘉永7年に、最初に「をびやゆるし」をいただくお方です。その「をびやゆるし」によって、大地震の最中に、長男亀蔵様をいとも楽々と出産なされたのであります。そして、そのおはる様が「をびやゆるし」で安産なされた様子が世間の評判になり、人々がだんだんと教祖を慕い寄るようになってきたのであります。

そして、教勢は大和一国に留まらず、河内、摂津、山城、伊賀という近隣の国々まで伸び広がる第1次拡張期ともいべき時代を迎えるのですが、その最中、最初に「をびやゆるし」の効能を見せられてから18年後に、おはる様が、7人目の男の子の出産直後にお出直しなされたのであります。

この事件について、『正文遺韻』(諸井政一著)52～53頁には、是はどういふわけかと申しますれば、この前年八月十三日に、櫛本の祭礼がござりまして、親族を招いて、さかもりを致されました時に、聊かの事で、客に不体裁に成りました処から、御夫婦で一寸、どうやこうやとものいひを致されましたが、何分一ぱい機嫌の時ですから、宗次郎様が云い過ぎましたのであります。『かじや如きが、御地場の娘さんとは、しょうがあはん。勿体ない。いんで呉れ』と仰有った。(中略)

神様のお話に『あいそづかしや、すてことば、切口上は、おくびにも出すやないで』と御いましめ被下ますは、このこととござります。いんでくれへ、と仰有ったおことばが、はしなくも神様の御うけとりなさる所となって、神さまの方へ引きとられて、こうくわいしてもまにあはん、のぞみ通りしてやったのやと、恐れ入ったおことばを、いたゞかにやならんやうになりましたのでござります。(中略)

そこで、このおはる様の御死去の時の御咄は、これひながたでござります。依って『あいそづかしや、すてことば。きり口上は、おくびにも出すやないで』と仰せらるる御言葉と、若し切口上、捨言葉を使えば、つかふ通り、望み通りに、神さまに扱はれねばならんといふ事を、心にをさめて、忘れぬやうにいたしましたならば、むかむかとはらだつ時でも、まづへと心をとらなほして、すてことば、切口上をださずに、親切の話ができる様に成るのでござりませう。

と記されています。

つまり、酒の席での言葉が過ぎたこと・切口上が、そのまま親神様に聞き届けられた。おはる様のお出直しは、“切口上、捨て言葉は決して使ってはならない”ということをお教えるための「ひながた」であったというのであります。

しかるに、筆者は、このおはる様のお出直しについての『正文遺韻』の説明だけでは、十分に納得できないのであります。

梶本惣治郎様が酒席で切口上、捨て言葉を使われたのも事実でありましょう。そして、そういう言葉を使ってはならないことを、皆に認識させることは大事なことでありましょう。しかし、そうは申しても、その事を教えるために、おはる様の命まで必要だったのだろうかと考えると、正直なところ納得がいかないものであります。

別の言い方をすれば、お道では、“親神様は、人間の心通りの守護をしてくださる”と聞かされますが、しかし、それは、信賞必罰が原則だということではないと思うのです。むしろ、親心によって大難を小難に、小難を無難にしてお連れ通りいただく道であり、小さな真実でも大きく受け取っていただける温かみが根底にある道だと思うのです。

また一方、梶本家は、他の中山家の親戚に比しても、抜きん出て教祖に尽くされたお家であります。惣治郎様御自身も、仏の惣治郎と呼ばれたほどの円満なお人柄で、教祖も「心の美しいを見てやる」と、おはる様との縁談を手放しでお許しになったほどのお方です。その惣治郎様が、たまたま酒に酔って「実家に帰れ」と言われた結果が、10カ月も後のお産の時に現れたというのは、ちょっと飛躍しすぎているように、筆者には思えるのであります。

この件については、“教祖は、道の上で重要な役割を果たすべきお身内の方には特に厳しい通り方を求められた。他より身内に甘い世上とは反対のあり様こそ、教祖が人類の母たるゆえんである”という見方もあるかも知れません。しかし、それでも、酒宴でのいざごの結果が10カ月後の出直しに現れた理由にするのは、かなり無理があると思うのです。『正文遺韻』の中の「をびやゆるし」の説明でも、「常の心のよし、あしをいふやない、常の悪しきは別にあらはれる」とありますから、「惣治郎様の10カ月前の切口上が産後のこじれの原因」というのでは、話の筋が通らないのであります。

それでは、おはる様がお迎えとりになった真の理由は何か？これについては、『正文遺韻』以上の資料が見つかりませんので、以下は筆者の推測・悟りで申すのですが…おはる様は、この最後のお産の時に、「をびやゆるし」を受けておられなかったのではないかと思うのであります。前年の8月に親族が村の祭りに寄った時の酒の席で、惣治郎様がお酒の強くない秀司様のためを思って味醂を出されたのに対して、皆さんに返杯ができないではないかと秀司様がクレームをつけられた(高野友治『教祖余話』18頁)。それで、この時のもめ事が原因で、おはる様がおぢばに帰りにくくなっていたのではないかと思うのです。そして、また、それまでにすでに6人も子供を産んでおられますから、無理をして教祖に「をびやゆるし」を願いに帰らなくても大丈夫だろうと思われたのではないかと推測するのです。

つまり、教祖が「をびやゆるし」を出す最初の台になされたお方が、後になってそれを軽んじることになった。それで、お産の後のこじれで生命を縮める大節を見せてまで、「をびやゆるし」の理の重さを示されたのではないか。そう考えた方が、この一連の出来事に納得できるのではないかと筆者は思うのであります。